

中国と日本の民俗の比較研究への期待

陶立璠[※]

1989年3月16日～27日、筑波大学大学院歴史人類学研究科の宮田登先生及び佐野賢治先生のお招きで、短期間の日本訪問の機会を得た。今度の訪問は、私にとっては、愉快で、忘れられない旅であった。短い10日間だったが、筑波大学での見学、学术交流のほか、また、東京、大阪、愛知、佐倉等でも見学と考察を行い、数多くの博物館と民家園が参観できた。たくさんの日本の民俗事象、民俗物品の陳列と展示を見て、日本の民衆と学者達が、伝承されてきた民間文化に対して、極めて大切に保護していることを痛感した。それは、文化だけでなく、日本の民族精神と創造力及び民衆の聡明と知恵を保護しているのである。とりわけ忘れがたいのは、大阪民族学博物館、佐倉の国立歴史民俗博物館、愛知県東栄町花祭り会館で見た日本の仮面展示であった。これを見て、思わず、1986年、中国の貴州省徳江県のある辺鄙な土家（ドカ）族の村で見た民間儺戯（一種の仮面劇）のことを思い出させられた。それは、ある冬の夜のことであった。周りの村の村民達が、期せずして集まってきて、古い木造の建物が揺れ倒れるかと心配するほど、小さな木造の楼や、庭は人で一杯であった。民間の芸能人が皆、仮面を被って、いろいろの伝統的な芝居を演出していた。とくに、生活習俗の物語を現す芝居が演出された場合、芸能人と観客との間では、対話したり、冗談を言ったりして、非常に楽しい雰囲気であった。従って、日本に滞在の際、中国の土家族の儺戯仮面に似ている日本の仮面を見ると、感激してならなかった。3月18日、愛知県新城市新城文化会館で、三河地区民間芸能大会を見る機会を得た。演出の間で解説を担当された実践女子大学教授三隅治雄先生が、その一連の巧みな解説で、演出を一段と輝かせたのであって、日本人の、伝統的な芸術に対する情熱を改めて感じさせられたのであった。演出の後、ホテルで三隅先生、佐野先生など日本の学者達と中国の仮面芸術文化についていろいろ話し合った。仮面芸術文化については、その歴史的な源と現在までの伝承を中日比較研究するに値することと思う。帰国後、間もなく、三隅先生を団長とする訪中団が、北京で日本の芸能を公演したことは、『中国文化報』で知った。残念ながら、そのことを知ったのは、三隅先生一行が既に帰国された後のことであった。

ところで、中国の儺文化（仮面文化）については、今までに、『儺文化に関する論争』という論文を書いた。最初、「貴州民族学院学報」1987年第二期に載せたが、その後、『儺戯論文集』（1987年、貴州民族出版社）に入れられた。本論文の中で、中国の仮面文化の歴史的な源と変遷について論じたと同時に、中国の北方のシャーマン文化との比較を試みた。そのとき、中国の

※中央民族学院漢語系副教授・中国民俗学会副秘書長

「儺」と日本の「能」との間になにか関係があるかとは、考えもしなかった。しかし、3月の日本への訪問が、両者を結び付けて、中日比較民俗学の一つの課題にしようと確定したのである。

人類学では、簡単な農業社会のことを「仮面文化」と称したように、仮面文化が早期農業社会の特徴をもっとも示すことができるのである。中国の仮面文化の形成と日本への伝播もこれに関わっている。今日では、中国と日本のいずれも社会的に変化してきたが、伝統的な仮面文化が依然として、保存と発展していたことから、その強い生命力を物語っているのではないかと思う。中国と日本の仮面文化は、いずれもその国独自の文化の一部であって、その関連と区別は、下記のように簡単にまとめておきたいと思う。

その源に関しては、日本の能楽は、中国の唐代の散楽と猿楽に由来した。この芸術の型式が日本に入ってから、その伝播のなかで、改造を加えられ、新しい変化が出て、日本民族の独特な創造になって、今日まで伝わってきた。それに対して、中国の儺文化は、文献によると、周代（紀元前9世紀）に形成され、最初は、一種の祭祀儀式で、鬼払いや疫病払いが目的で、原始的な巫術の性格をもっていた。この儀式は、長い間続いてきて、宋代（紀元960～1279年）以後、戯劇に変わっていた。現在では、中国の江西、安徽、湖北、広西、貴州、雲南などの地方で伝わっている種々の儺戯は、正にこの文化の余脈である。日本の能が、名称上では、一種の芝居の形式を指している、その意味は、表演の才能、能力、技、即ち、芸能人が持っている専門的な技能とその活用のことである。これは、中国の儺とは、随分違うのである。

現在、中国の儺戯は、ほとんど南中国及び西南諸省の辺鄙で、交通の不便な農村地域で、伝わっていて、比較的原始的な形態を残している。その伝承は、昔からの原始宗教、信仰の色彩に富んでいるが、それと異なって、日本の能は、仮面を被る純粋な芝居形式である。

中国の儺は、主に民間の巫師によって伝承された。儺戯の演出場所も、主に農村地域で、正式な舞台がなく、厳密なプログラムもないのである。しかし、日本の能は、専門の戯作者がいて、そして集大成した人物も数多くいた。例えば、南北朝時代の観阿弥（1333～1384）や、室町時代の世阿弥親子など。更に、能の演出は、一般に宮廷と都市で行われ、形式の厳密で、比較的高級な芝居表演の一つである。

仮面を使うことは、儺と能の共通な特徴であろうが、芝居の服装と舞台の要求はかなり違うと思う。中国の儺戯仮面の作成は、全く、民間の職人の手によって作られ、種類も多い。宋代の詩人陸游の『老学庵筆記』によると、広西壮族（チワン族）儺戯に使われた仮面が800もあったとのことである。儺戯の仮面は、芝居の中の人物の性格によって、誇張と変形の方法で、生き生きとする雰囲気を作らせるのがよくあることである。服装に関しては、漢民族の芝居服装の形を借用するほか、普段着をきるのも多い。そして、舞台が不要で、露天舞台劇の一つである。それに反して、日本の能に使われた仮面の作成は、ほとんど芸術家の手によるもので、梅若氏のような仮面創作芸術大師さえ出てきた。服装の作成は、生地から、デザイン、作成まで、非常に念を入れていて、能の服装そのものを見るのも芸術の鑑賞である。又、能の演出には、正式な舞台と場所が要る。

中国の儺文化は、最初から巫術文化の一つであり、道教からの影響が大きかった。儺戯は、民間の芸能人の口で、創作され、伝承されたので、今日まで残っている芝居の中には、口承された神話、伝説、物語から劇化されたものや、漢民族の芝居から改めたものが多く、そして、それらのほとんどは、巫師によって完成されたのである。それから、儺戯に使われる仮面には、鬼の仮面がない。しかし、日本の能は、全く文人によって創作され、そして、フォーマルな劇にあたる能とコメディにあたる狂言に分かれて、鬼が出てくる場面もある。又、能の表演には、仏教の影響が大きい。

以上、中国の儺と日本の能について個人的な覚えであるが、非常に浅薄で、誤ったところもあるかも知れない。しかし、それは、それ程重要なことではない。重要なのは、以上の例を通して、中国と日本の民俗について比較研究が広い範囲においてできることが言いたいのである。日本の学界では、仮面文化の研究はずっと盛んに行われていて、且つ研究の蓄積も豊富であるが、中国では、ここ数年来小さな儺戯研究のブームがあったが、僅か数回のシンポジウムを開いたぐらいである。1981年、湖南省儺戯研究所が湖南省儺戯の伝播について、調査を行い、同年に、湖南省儺戯研究座談会を開いた。1984年3月、広西壮族（チワン族）自治区戯劇研究室によって、座談会が開かれ、チワン族、モーナン族、モロー族、漢民族の師公（男巫）劇・音楽についてシンポジウムを行い、演出もされた。1986年11月、貴州省にて、全国儺戯學術シンポジウムを開き、私も出席して、中国の儺文化の設立について発表をした。1987年冬、貴州省が北京において、儺戯仮面の展示会を催し、『儺戯論文集』も出版され、中外の関係研究者のなかで大きな反響を呼び起こした。現在では、この研究は、盛んになり始めたところであるが、仮面文化に関する中日の比較民俗学的な研究は、まだ少ない。これを一つの課題として、両国の研究者が共に研究を進めることを期待している。

中国と日本とは、一衣帯水の隣り国で、両国の風俗文化の交流も長い歴史を持っている。物質的、社会的、心意的な民俗の面で、共通点が多く、研究の範囲も広い。もちろん、この研究には、困難があるかも知れないが、今後やらなければならないと思っていることを簡単に下記の通りにまとめてみた。

第一、中日両国の民俗学的理論の交流を強化すること。

日本では、柳田国男を始め、民俗学的な研究は、ずっと続けられてきて、極めて大きな成果を遂げている。柳田の著作は、相次いで、中国に紹介され、中国の民俗学の発展に大きな影響を与えている。関敬吾氏の『民俗学』、後藤興善氏の『民俗学入門』等多くの日本研究者の著作が中国語に翻訳され、中国の学者達に日本民俗及び日本人学者の理論と學術観点を理解させるには有益なことだと思う。中国民俗学は、ここ十数年以來、著しく発展を遂げた。民俗調査、研究結果の出版は成果が大きい。理論的著作、優秀な論文なども少なくないが、残念ながら、日本語に訳されたのはまだ少ないため、中日比較研究には不利なことと言わざるを得ないであろう。両国の学者の間で、民俗学理論について研究成果を相互に理解、交流することは、あくまでも比較研究の基礎となることではないかと思う。

第二、情報と資料の交流を強化すること。

中国民俗学界は、1983年5月に北京にて発足され、本部は、北京師範大学に置かれている。鐘敬文先生が理事長を務めている。この学会には、現在、全国において800人余りの会員をもって、とくに、若手研究者達が各地域及び各民族のなかで活躍している。毎年、会員達は、フィールドワークを行い、生の資料を大量に入手している。現地調査を重視することは、ここ十数年来中国民俗学の大きな特徴の一つと言えるであろう。もちろん、日本の学者達も毎年中国各地での調査を行うのであるが、両国の間での情報交流が少ないのが現状であり、互いに閉鎖状態にあると言わざるを得ないであろう。中日比較民俗学の発展は、双方の相互交流によるものだと思う。

第三、中日共同的な調査と研究を強化すること。

今年の3月に、中日の学者達が南中国の農耕文化についての共同調査を行う予定であり、又、次の段階で、西南日本に於ける農耕文化を調査する上で比較研究を試みると計画されている。これは、良きスタートであって、中日民俗学研究の中でも開拓的なことだと思う。私は、その共同調査のメンバーの一人として、調査が円満的に成功するように希望している。もちろん今度の調査は、総合的な調査で、参加者の数も多いが、将来、可能であれば、課題別の調査をも行ったらよいのではないかと思う。例えば、1991年は中国の茶栽培技術が日本に伝来されて800周年であるし、中日文化の中でも、茶文化が、特色のあるものであるが、今まで、民俗学的比較研究が少なかった。その外、飲食、居住、服飾、年中行事、人生儀礼、宗教信仰などについても、比較研究に適する課題が多いと思う。口承文芸に至っては、中日学者達の間では、協力と研究がわりと密接で、喜ばしい成果も多いが、ここでは敢えて贅言を省略した。

以上、昔から、ずっと考えてきたことであるが、若干不完全なところがあるかも知れない。しかし、それは、絶対に唐突なことではなく、行動に移せばきっと実現できることだと思う。私は中日比較民俗学がより広い分野において、すばらしい成果を上げるよう心より期待しているのである。

1990年1月16日 北京

(田 薇 訳)